

補助人工心臓とともに生きるという選択 ～小さなポンプが担う、大きな役割～

心臓は1日に十萬回以上鼓動し、全身へ血液を送り続けています。しかし、さまざまな病気によりその力が弱くなると「心不全」と呼ばれる状態になります。進行すると息切れやむくみが強くなり、これまで通りの生活が難しくなることがあります。近年、この心臓のポンプ機能を補う治療として注目されているのが補助人工心臓（VAD）です。

補助人工心臓は、心臓の代わりに血液を送り出す小型のポンプ装置で、自身の心臓だけでは十分な血流を保てないときに使用します。体内に埋め込むタイプと、体外に装着するタイプがあり、患者さんの状態によって使い分け

られます。装置が血液循環を助けることで、呼吸のつらさが改善し、動ける範囲が広がるなど、日常生活の質が大きく向上します。近年は機器自体の改良も進み、より安定した循環補助が可能となっています。

元々、補助人工心臓は「心臓移植までの橋渡し」として使われてきました。しかし現在は、心臓移植を前提としない治療としても一定の役割を持ち始めています。薬物治療やカテーテル治療だけでは十分に改善が得られない重症の心不全に対し、選択肢を広げる医療技術として期待されています。

一方で、補助人工心臓には定期的な装置の管理が欠かせず、感染予防をはじめ

とした注意点もあります。治療を選択する際には、専門医による十分な説明を受け、生活面のサポート体制も含めて検討することが大切です。継続的なフォローアップも不可欠です。

心不全は「新たな国民病」とも言われ、高齢化に伴い患者数の増加が見込まれています。誰にとっても身近になりつつある病気ですが、医療の進歩により治療の幅は広がっています。胸の苦しさや疲れやすさなど、気になる症状がある場合は、早めに医療機関へ相談することが大切です。早期に適切な評価を受けることが、より良い治療につながります。



市立函館病院

循環器内科

青柳 裕之 医長

略歴

平成27年、北海道大学医学部卒業後、旭川赤十字病院、市立函館病院、北海道大学病院勤務を経て、令和6年、市立函館病院に着任。日本循環器学会認定循環器専門医、日本超音波医学会認定超音波専門医。